

千刈狸の呟き

～ 死に方 指南? ～

以前センガリ平野に、狸族が拠点と称するスミカがあった。お上が定めた土地の名はツツミワキであったが、大体センガリで通っていたようだ。その頃はアタリヤマイが多く、見兼ねた時の親分が、早く働けるようにしてやりたい、タンボが忙しいときには預かって家族が働きやすくしてやりたいと考え、お城からはるばる温泉まで引いて造ったという。センガリ平野は暖かいが、少し山に入ると厳しい冬が待っている。そのような時も温泉のスミカに預かって感謝されていた。お上もわりに鷹揚で、ゆったりとやっていたらしい。

しかし時と共に年寄りが増えお上もお金に厳しくなってきた。立派だった温泉付きのスミカも壊れが目立ち狸族は寄り合いを持った。そろそろ止めよう、いやいや「軽いヤマイの養生所」には金を出すと云うから造り直そう、いやいやお上は信用ならんとカンカンガクガクの末、8年前ミズバヤシに造り直した。温泉こそ無いが松林の中の広々としたスミカである。軽いヤマイを集め、農繁期対策や越冬機能もそのままにやっていたが、やがてお上から横槍が入った。

3年前、「ここに入れて良い軽いヤマイとは次のものとする」という高札が立ち大部分が追い出された。仕方なく「障害者の養生所」に変身したが、昨年また「ここに入れて良い障害者はアタリとボケによるもの以外とする」と高札が立った。同時に75歳以上を別扱いにしたことで「姥捨てか!」と騒がれもした。加えて「死は自宅または介護施設で迎えるように」と、末期を追い出す手順までコト細かに作り、褒美をつけて奨励した。さすがにすぐ凍結されたが。

昔は家で死ぬのは当たり前であり、看取るまでの世話をする家族も大勢いた。しかし近年、核家族化と共に死は身近でなくなった。養老孟司氏はどうまいことを書いている。死は誰にでも来るしウ

ンコは誰でもする。しかし近年どちらも視界から消えた。ウンコは見ずに(水に?)流すし、死はブラックボックス(病院)に入ってしまったと言うのである。死期が近くなると請求が跳ね上がる。お上が目をつけたのもそこである。どうせ死ぬなら出してしまえと。

医師にとって延命は至上命令であった。いや今でも変わってはいないと思う。昔は自分で食べられなくなったらそれまでとされていたのが医学の進歩でその先も可能になった。苦痛を与えながらの延命は問題かもしれないが「死」は当事者個人の問題であり、寄ってたかって強制すべきものでもなかるう。

時には家族から「早く楽にしてやって下さい」と言われることもある。幸いわが国には「安楽死」の法律は無い。うっかり殺人者になる訳にもゆかない。

スパゲッティ症候群という単語があるらしい。傍からみて大変だろうなという感情から出たものと思う。必死にやっている方にすれば侮辱的な名称である。

「ところで骨狸よ。お前最後はどうして欲しい?」「私ですか?出来るだけ長く地球上の空気を吸っていたいですね。マッカーサー將軍の言葉でも借りましょうか? 老狸は死なず、ただ消え去るのみ・ナンテネ。」

(骨 狸)